小學尋常讀本

淺尾重敏編

卷四

検定申請本

K120.8
60
4

K120.8

60

4

小學尋常讀本

淺尾重敏編

三書堂

三書堂

小學尋常讀本卷四目次

第一課　サル
第二課　塩
第三課　蟻
第四課　鶴と亀
第五課　馬
第六課　しやうか
第七課　竹
第八課　夕すゞみ
第九課　秋
第十課　川のみなもと
第十一課　冬
第十二課　蝸牛

第十三課　兄弟姉妹
第十四課　著物
第十五課　手習ヒノダウグ
第十六課　魚
第十七課　鳩ト蟻トノハナシ
第十八課　善き友と惡き友
第十九課　富士山
第二十課　兵
第二十一課　草ト木
第二十二課　二大恩

目次終

小學尋常讀本卷四

第一課　サル

サルハ、ヨク　ヒトノ　マ子ヲ
シマス、ソレ
ツ子ニ
ヒトマ子　バカ
リスル　ヒトヲ、

サルノ　ヤウダト　マウシマス。

マタ　サルト　イヌトヲ、イツシヨニ　オクトキハ、ケンクワヲ　シマス、ユヱニ　タガヒニ　イサカヒ　バカリスルヒトヲ、サルト　イヌノ　ヤウダト　マウシマス。ケンクワヲ

シタリ、ヒトマヲ子　バカリスルハ、ヨクナイ　コトデ　アリマス。

第二課　鹽

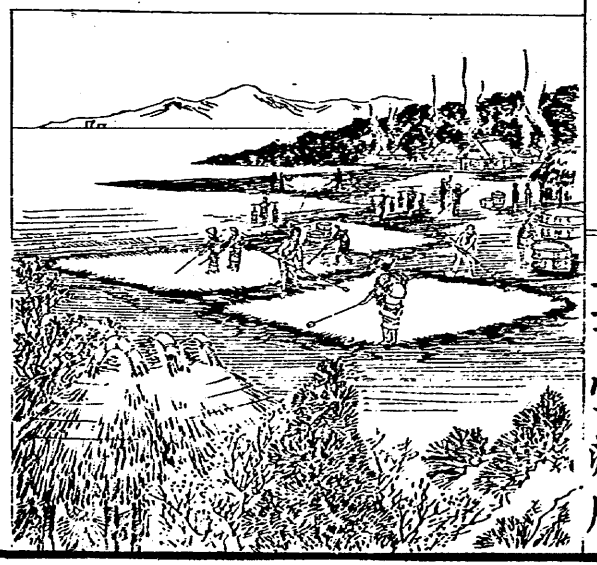
鹽は、多く　海水を　にて　せいする　ものなれども、又　山鹽とて、山より　掘出す　もの

海　鹽　掘

味

もあり。鹽は、食物の味をとゝのふるものにして、人の身體をやしなふに大切なるものなり。

身體



第三課　蟻

蟻

蟲

多クノ蟻ガ、ギヤウレツヲナシテアユメリ、コレハ食物ヲオノレノスミカニ持チハコブナリ。蟻ハ、小サキ蟲ナレドモ、ハナハダカシコク、夏

ノ　アヒダニ　食物ヲ　タクハヘ
ヒ、　冬ノ　サムクシテ、　外ニ
出ラレヌ　時ノ　ヨウイヲ　ナリ
スナリ。

仕事

汝等、　モシ　仕事モ　ナサズ、

學問

學問モ　ツトメズ、　ムナシク
クラサバ、　彼ノ　蟻ニモ　オトル

ト　イフベシ。

第四課　鶴と龜

鶴

鶴は、　大なる　鳥にして、　其

羽

羽　白きこと　ゆきの　ごとく、
くちばし、　くび、　はぎ　とも

長

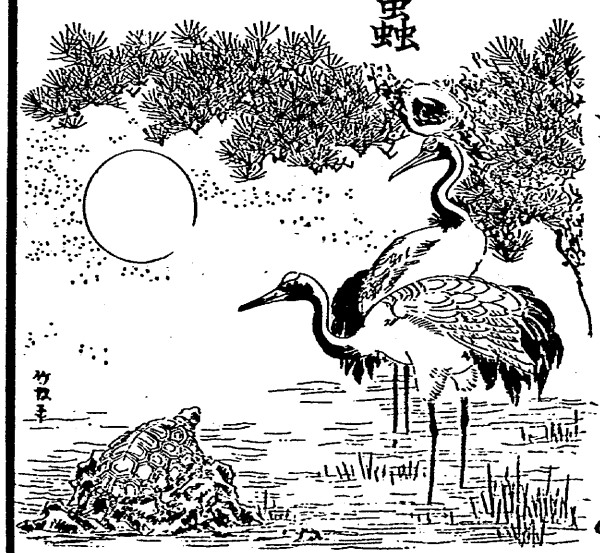
に　長し。
此ノ　鳥、　よるは、　たかき木の

魚

上に　ねむり、　ひるは、　あさき
水ぎはに　魚、　蟲を　もとめ
食ふ。

龜甲

龜は、　甲ある　蟲
にして、　かしら
小さく、　四本の
足あり。　川、　海



馬　獸走　故

などに　すむ　ものなれども、
時々　をかに　はひ　出づるこ
ことあり。

第五課　馬

馬ハ、　大ナル　獸ニシテ、　走ル
コト　スミヤカナリ、　故ニ
人ノ　ノルニ　用ヒ、　イクサノ

重荷

時ナドニハ、キハメテ大切ナルモノナリ。又重荷ヲオヒ、田ヲタガヤシテ、人ノ力ヲタスクルコト多シ。

馬車トハ、馬ノヒク車ニシテ、人力車ヨリモハヤキモノナリ。

○練習

○學問ハ、身ヲ立ツルノモト丼ナリ。

○木ノ上ニ、鶴トマリ。水ノ中ニ、龜オヨグ。

○鳥ハ、ツバサニテトビ。魚ハ、ヒレニテ

オヨグ。

○蟲ノ　中ニハ、ヨク　オノレノ　仕事ヲ、ツトムル　モノアリ。

○獸ハ、人家ニ　カフモノト、野山ニ　スムモノト　アリ。

第六課　ーやうか

すめらみくにの、ものゝふは、いかなることをか、つとむべき、

たゞみにもてる、まごゝろを、きみとたやとに、つくすまで。

○

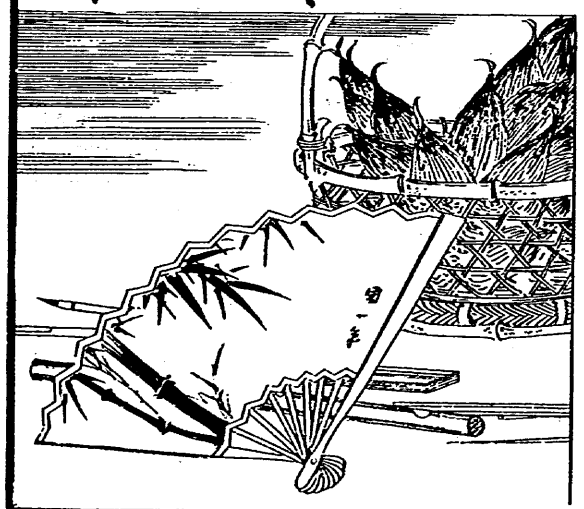
すめらみくにの、をのこらは、たわまずをれぬ、こゝろもて、よのなりはひを、つとめなし、くにとたみとを、とますまで。

第七課　竹

國　竹ハ、我國イヅレノ所ニモ

生　生ジ、四五月ノコロ、其根

筍　ヨリ筍ヲ出ス、人々コレヲ食用トスレドモ、



種類　アマリヤシナヒニハナリガタシ。又竹ノ種類ニヨリ、用ヒ方種々アリテ、我等ノ

笛　ツ子ニ用フルアフギ、笛、カゴ等ハ、ミナ竹ニテツクリタルモノナリ。

第八課　タすゞみ

暑

夏の　きはめて
暑き　日は、身體
も　つかれ、心も
うむ　ものなり、
かやうなる　日
には、夕方より
川の　きは、又は

或　舟　涼　吹　來　萩

海の　ふちに　ゆくか、或は
舟を　水上に　うかぶる　と
きは、涼しき　風　吹き來りて、
其暑さを　わするゝ　ものな
り、これを　夕すゞみと　いふ。

第九課　秋

秋ハ、野ベニ　萩、女郎花　ナ

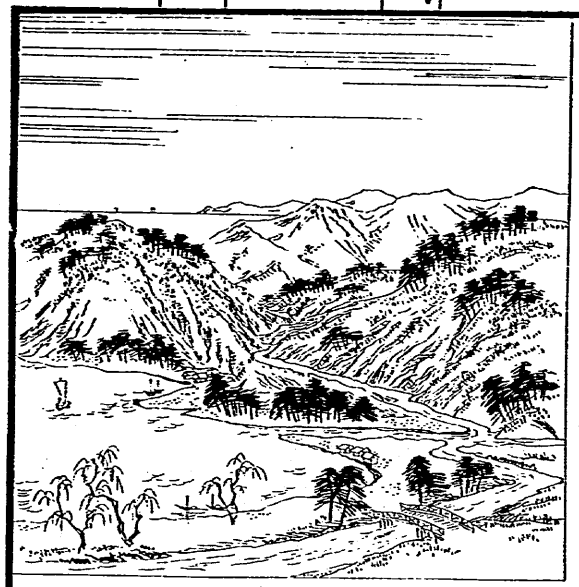
ドノ　ヤサシキ花　ヒラキ、ク
サムラニ、マツ蟲、
スヾ蟲　ナドノ
ナク子　涼シク
キコユ。又　オ
ホゾラニ、白キ
オビノ　ヤウナル

見　天　稻　農夫

モノヲ　見ルナラン、コレハ
天ノ川トテ、數多ノ　ホシノ
アツマリタル　モノナリ。
秋モ　スエニ　イタリ、稻モ
ミノレバ、數多ノ　農夫ハ、田
ニ　出デヽ、稻ヲ　刈リトラン
ガ　タメニ、イソガハシク　ハ

タラクナリ。

第十課　川のみなもと



間　谷

山と　山との
間に　ありて、
ひくき　所を
谷と　いふ。
川の　みなもと

泉　流　浅　河　末

は、多く　谷の　間より　わき
出づ、これを　泉と　いふ、其
流れ、はじめは　ほそく　浅け
れども、多く　あつまれば　大
河と　なりて、末は　みな　海
に　入る。

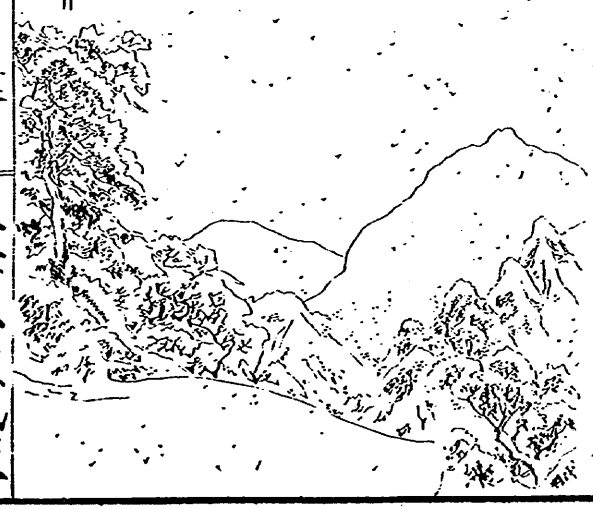
○練習

○農夫は、稲　又は　麥、豆　等を　作る
ものなり。
○今日は、暑さ　つよきゆゑ、數多の　子供
は、河に　出でゝ　舟を　こぎ、或は　淺
せにて　たよぎ　をれり。
○涼しき　秋の　夜に、とほく　吹き　たく
る　笛の　ねを　きゝ、又は　谷間より
もれ來る、泉の　たとを　きくは、心の
すみ　わたる　ものなり。

短

第十一課　冬

冬ハ、一年ノ中、日　短ク　夜
長キ時ニシテ、
多クノ　草木
ハ、其葉　カレ
オチ、タヾ
ノコレルハ　トキ〃



松　寒　雪　綿

ハ木トテ、松　ナドノ類　ノミナリ。冬ハ、風寒ク、時々　雪フリテ、何所モ　白キコト、綿ヲシキタルガ　ゴトクナルコトアリ、此時、野ノ　鳥ヤ獸ハ、ミナ　ス　或ハ　アナニカクレ、タヾ　エヲ　アサル

里　暖　蝸牛　頭

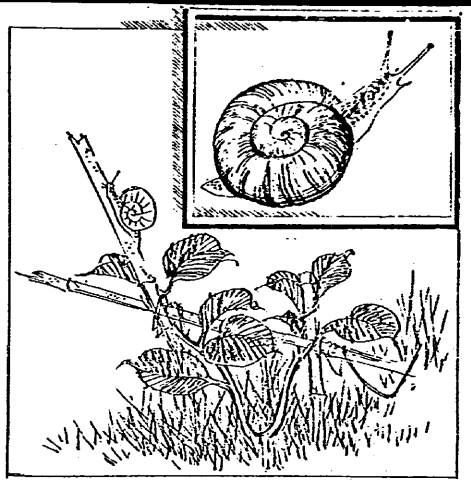
タメニ、ヨリ〳〵　村　里ニ出ヅル　ノミ。サレドモ、此寒キ　冬ヲ　コサバ、又　暖カナル　春ト　ナルナリ。

第十二課　蝸牛

蝸牛は、足なき　蟲にして、頭には　四本の　角あり、其内

先　脊　若

二本は　長くして、其先に　目あり、他の　二本は　短くして、其下に　口あり。又脊の　上に、大なる　からを　たひ、若しも　のに　たてる、ときは、其内



至　待　机　讀　針

に　かくれ　入るなり。

此、蟲は、冬の間　土中に　かくれ、夏の　至るを　待ちて、地上に　はひ　出づるなり。

第十三課　兄弟姉妹

家ノ　内ニテ、机ニ　ムカヒ本ヲ　讀ムハ　兄ニシテ、針仕

居　妹　姊

事ヲナシ　居ルハ　姊ナリ、
又門ノ外ニテ、弟ハコマヲマハシ、妹ハオニゴトヲナシテアソベリ。

此ノ兄、弟、姊、妹ノ中ニテ、イヅレヲヨキ子供トオモフヤ、兄ヤ姊ノゴトク、學問ヤ仕事ヲシテ、ノチアソビタハムルヽハ、タノシキモノナレドモ、毎日ケイコモナサズ、父母ノイヒツケラルヽ、

習

用事ヲモ　ツトメズ、　アソビ
タハムレテ　ノミ　居ルハ、
ヨロシカラズ、　故ニ　此ノ　弟モ、
妹モ、　兄、姉ヲ　見習ラハザル
トキハ　ヨキ人ニ　ナリガタシ。

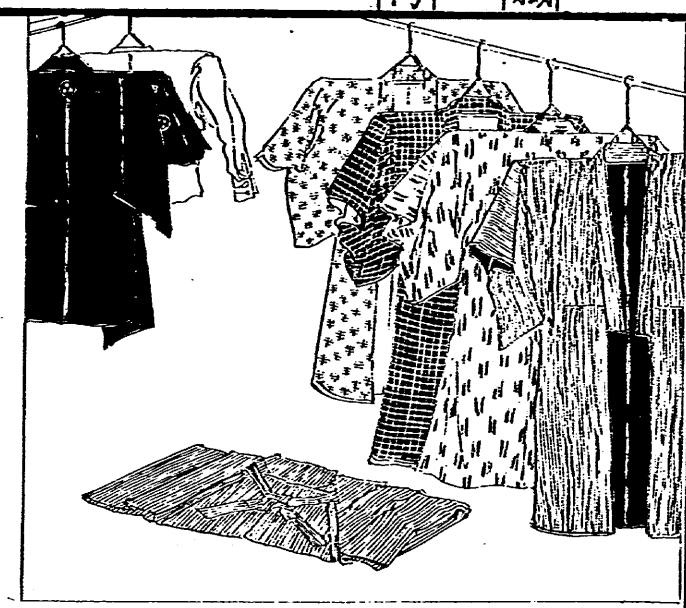
第十四課　著物

著物に　種々あり、　冬　著るも

單衣　袷　帷子

のを　綿入と　いひ、　夏　著る
ものを　單衣と　いふ、　又　袷
と　帷子とあり、　袷は、　綿入に
ては　あつく、　單衣にては　ひ
やゝかなる　時に　用ひ、　帷子
は、　單衣にても　なほ　暑き
時に　用ふるものなり。

羽織　袴



此レ等の　著物の
上に、　羽織を
著、　袴を　は
くことあり。
又　はだに　著
るものに、　ドゆ
ばん、　或は　しやつあり。

禮儀　筆　墨　硯

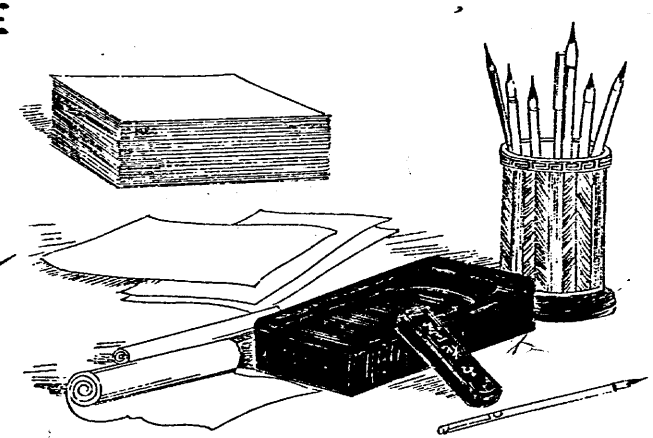
すべて　著物は、　身體を　まも
る　のみならず、　禮儀を　と、
のふる　ものなれば、　著方を
たゞしく　すべし。

第十五課　手習ヒノダウグ

汝等、　毎日　用フル　トコロノ
筆、　墨、　硯、　紙ハ、　何ニテ

毛

作リタルモノナリ。
ルカヲシレリヤ、
筆ハ、竹ヲ
クトシ、獸ノ毛
ヲホトシテ作
リタルモノナリ。
硯ハ、石ニテ作リタルモ



岡　製　楮

ノニシテ、水ヲ入ル、トコ
ロヲ海トイヒ、墨ヲスル
所ヲ岡トイフ。墨ハ、ユ
エンヲ子リカタメテ製シタ
ルモノナリ。紙ハ、楮ニテ
作リタルモノ多ケレドモ、
又ワラニテ製シタルモノ

西洋

モアリ、其　種類ニモ　半紙、ミノ紙、西洋紙　ナドアリ。

第十六課　魚

産

魚には、川に　生ずるものと、海に　産するものとの　二種あり。

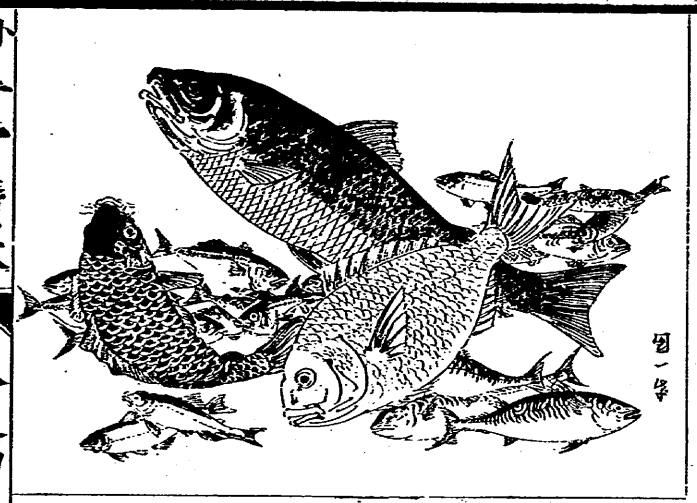
好

川魚の　中、人の　多く　好む

鯉

は　鯉にして、これに　次ぐものは　あゆ、さけ等なり。

鯛



海魚も　數多あれども、其　味　上品なるは　鯛なり、ゆゑに　よき

平常　價　安

りやうりには、かならず　これを　用ふ。又　平常の　食用に　あつる　ものには、いわし、あぢ、さば　などあり、これらは、其　價　安き　ものなり。

○練習

○人ト　マジハルニハ、禮儀ヲ　タヾシクスベシ。

○毛織ノ　著物ハ、暖カニシテ、寒サヲ　フセグニ　ヨロシ。

○雪ハ、冬ノ天　寒キ時ニ　フルモノニシテ、白ク　ツモリタルサマハ、綿ヲ　シキタルガ　ゴトシ。

○モヽ太郎ハ、子供ノ時ヨリ　カツヨク、長ジテ　オニガシマニ　至リ、オニヲ　コロシ、數多ノ　タカラ物ヲ　持チカヘリタリ。

鳩　匹　死

第十七課　鳩ト蟻トノハナシ

一匹ノ蟻、アヤマチテ水タマリニオチイリ、水ニオボレテ死ナントセシニ、ヲリフシ

助　落　危

一羽ノ鳩、木ノ上ニアリテ、コレヲ見、蟻ヲ助ケントテ、數多ノ木ノ葉ヲ落シケレバ、蟻ハヨロコビ、其上ニハヒ上リテ、危キイノチハ助カリタリ。其ノチ一人ノエサシ、彼ノ鳩ヲサヽ

恩

ント　セシトキ、　蟻ハ、　サキノ
恩ヲ　ムクイントテ、　エサシ
ノ　足ニ　カミツキテ、　オドロ
カセシカバ、　其ヒヤウシニ、　鳩
ハ　トビ　ニゲタリ。

第十八課　善き友と惡き友

友　善　惡

友には、　善きもあり、　惡しきも

交　近　血　親

あり、　善き　友に　交はらば、
善き　事を　習ひ、　惡しき　友
に　近づかば、　惡しき　事を
たぼゆ。　ことわざに、　血に　交
はらば、　あかくなると　いふこ
とあり、　これ　善き　友に　親
しみて、　かならず　惡しき　人

正直

に　交はる　べからざる　こと
を、いまーめたる
なり。人と　交は
るには、正直なる
心を　もつて、
親切に　すべし、
若し　わうちやく

冨士

高

ならば、善き　友にも　うと
まるゝに　いたらん、つゝしむ
べき　ことなり。

第十九課　冨士山

冨士山ハ、日本　第一ノ　高山
ニシテ、駿河ノ　國ト、甲斐ノ
國トノ　間ニ　ソビエ、高サ

扇

万千尺

一万二千四百六十尺ホドアリテ、四時白雪ヲイタヾケリ、其形ハ、扇ヲサカサマニカケタルガゴトクニシテ、

同

項

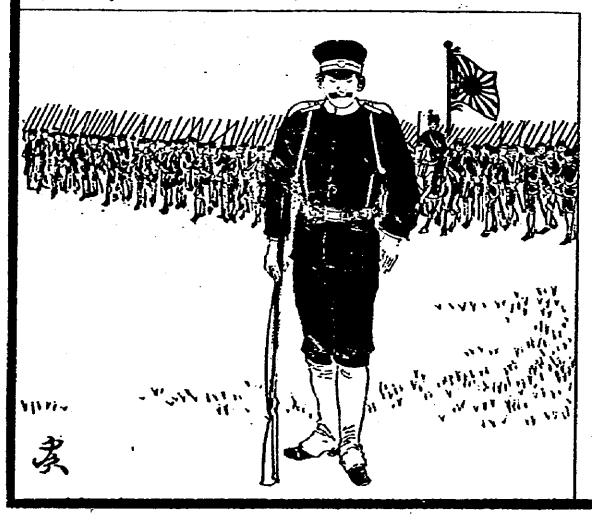
イヅレノ方ヨリ見ルモ、ミナ同ジ形ニ見ユルナリ。此ノ山ムカシハ、其項ヨリ火ヲフキ出ダシタルコトアリシモ、今ハタヾ其アトニ、大ナルアナヲノコセルノミ。

第二十課　兵

我カ　日本の　人數は、　四千百万人餘ありますが、

餘　皆　臣民　様

此、人々は、皆天子様の　臣民にして、兄弟も　同ものなれば、



守　成

力を　あはせて、國を　守らねば　なりませぬ、國を　守るには　兵が　いります、故に　男子は、成長したる　のち　兵となりて、國の　ために　はたらかねば　なりませぬ。

第二十一課　草ト木

梅　櫻

草木ノ中ニテ、梅、櫻、ボタン、キク、スヰセン等ハ、其花ウルハシクシテ、カホリモヨロシ。

桃、スモヽ、柿、ナシ等ハ、其實ハナハダ甘シ。

實　甘

此レ等草木ノ花ハ、春、夏ニ開クモノト、秋、冬ニ開クモノトアレドモ、其實ハ、多ク夏又ハ秋ニ開クモノナリ。

開

杉　又　松、杉、クサマキ　等ハ、

材　其　材　種々ノ　用ヲ　ナス、

中ニモ　松ト　杉トハ、用フル

所　モツトモ　ヒロシ。

第二十二課　二大恩

住　汝等の　住むに　家あり、著る

飲　に　衣あり、飲食するに　ふど

教　算術　書

ゆう　なきは、これ皆　父母の

たまもの　なり。

又　汝等に、讀み、

書き、算術、其

他　種々の　學問

を　教ふるは、先

生なり。

忘　各

されば、汝等　此ノ　二ッの　大恩は、いかにして　むくゆべきや、

成長の　のちは、一家の　仕事に　さしつかへ　ざるやう、今より　各く　其　身を　立て、家を　わこす　ことに　心がけ、父母、先生の　恩を　忘るべからず。

○練習

○犬は、夜を　守る　のみならず、よく　恩人を　わすれざる　ものなり。

○人の、一日も　かくべからざる　ものは、衣ふく、飲食、住居の　三ッなり。

○富士山は、我ガ國　第一の　高き　山にして、櫻は、我ガ國　第一の　うるはしき　花なり。

K 120.8-167-1

○左のなまへを讀むべし、

櫻田梅太郎、　杉井松平、
姉川鯉三郎、　龜岡鶴次、
富士谷雪助、　秋野稻作、
白根好、　里見數馬。

小學尋常讀本卷四終

明治二十七年十二月五日印刷
明治二十七年十二月十二日發行　（定價金六錢五厘）

編纂者　富山縣士族　淺尾重敏
發行者　富山縣平民　中田清兵衛　神戸市山本通五丁目七番屋敷
　　仝　富山市大字東四十物町三拾五番地　小林恒太郎
　　仝　富山市大字中町貳拾番地　大橋甚吾
印刷者　富山市大字西町拾五番地　土井宇三郎
　　仝　富山市大字東四十物町貳番地

版權所有